

佳作

一意奮闘

秋田県能代市立能代南中学校

3年 菊池 美結

小学4年生の冬、私は習字教室の先生に申込書を渡した。そこは、暖房の音が響く、墨汁の匂いが充満した居心地のよい場所だった。私はその時、お宝を見つけた時のような嬉しさにいっぱいになった。その日から私の挑戦が始まる。

同学年の人も何人か習っていた。小学1年生から習っている人が多く、4年生から習い始めた私は皆と級位に差があった。しかし、先生からのアドバイスのおかげで、すぐに追いつくことができた。負けず嫌いの私は、皆より上手になりたいと思い、誰よりも集中して書いた。小学6年生では、大会で一番よい賞をいただいた。初めて新聞に名前が載り、とても嬉しかった。だが、市の大会だったため、全国の大会では中くらいの賞ばかり。とても悔しかった。小学6年生の時に、全国の大会でよい賞をとるという新たな目標ができた。

中学生になると、課題が難しくなった。部活や勉強をするために何人か辞めてしまった。仲が良い人も辞めてしまった。だが、新しく友達ができた。ライバルとして一緒に習字を楽しむ仲になった。

中学1年生の時、また市の大会に行った。会場で一斉に書くため、すごく緊張した。3枚しか書けないため、失敗できない。6年生の時はコロナのため、慣れている教室で書いた。だから、会場で書くのは初めてだった。すごく手がふるえた。3枚とも失敗してしまった。制限時間を10分も残していた。みんなはまだ真剣に書いている。もっと練習していればよかった。すごく後悔した。その大会は私の得意な硬筆だった。なんとかなるだろうと軽く思ってしまった。次の日、先生から大会の結果を教えてもらった。結果は銀賞。字の濃さだけほめてくれた。とても悔しかった。その何日か後には毛筆の大会があった。今度こそ一番よい賞を取ろうと、基本から練習を始めた。そして大会当日、すごく緊張した。失敗はしなかったが、思い通りの字を書けなかった。結果は金賞。一番よい賞は取れなかった。金賞も嬉しかったが、6年生の時の私に負けたと思うと、とても悔しかった。

中学2年生になり、1年生の頃と比べると、とても字がきれいになった。そして市の大会が近づいてきた。練習を頑張った。硬筆の大会の日になった。2年生になってもすごく緊張した。やっぱり手が震える。自分の手が分からなかった。制限時間に急かされる。失敗してしまった。2枚目を手に取る。調子がいい。だが最後の最後で失敗。最後の1枚。手が震える。ちょっと曲がってし

まった。だが、もう紙がない。残り5分。最後まで書いた。思い通りの字を書けなかった。結果は金賞。字の濃さを評価してくれた。金賞は運が良かっただけにしか思えない。次の毛筆の部に切り替えるしかなかった。だが、得意な漢字が入っていたため、調子に乗ってあまり練習をしなかった。会場に着き、書く準備をする。先生が来て応援してくれた。その日はいつもより緊張しなかった。手もあまり震えない。余裕だと思った。だが、思い通りの字が書けなかった。もっときれいに書けるはずなのに。練習しなかったのが悪かった。結果は金賞。また後悔をした。

中学3年生の今、毛筆の八段試験がある。試験は、実技、理論、作文の三つ。会場ではなく、教室や自分の家で書いて先生に提出する。何日かかけて提出した。結果はまだ分からない。その間に硬筆が準八段になっていた。まだ要項はきていないが、八段試験がまたある。合格できるよう、今から頑張りたい。今年の市の大会は、私にとって最後。高校生は参加できないからだ。今まで以上に頑張りたいと思った。試験後、すぐ硬筆の市の大会があった。最後は一番よい賞を取りたいと強く思った。当日、手の震えが止まらなかった。2枚失敗してしまった。最後の1枚、すごく集中した。すこしうまく書けた。だが、隣の人は私より上手な気がした。大会終了後、家に帰った。宿題をしていると、習字の先生から電話がきた。一番よい賞を取ったという電話だった。嬉しすぎて外に走りに行った。家に帰ると家族にほめられ、ニヤニヤが止まらなかった。何日か後に新聞に私の名前があった。今までと違い、一番よい賞は私以外いなかった。すごく嬉しかった。毛筆の大会はまだないが、当日頑張りたいと思う。

小学4年生から始まった私の挑戦。習字は私の人生を大きく変えてくれた。高校生になったら書道部に入部し、もっと字が上手になれるよう頑張りたい。まだ全国の大会でよい賞をとっていないから、もっと挑戦していきたいと思う。目標達成のために、努力していきたい。